

# JMMA

## 日本ミュージアム・マネージメント学会

### 会 報

## ● 創刊準備号 ●

### 〈日本ミュージアム・マネージメント学会設立の趣旨〉

我が国は現在、さまざまな面で転換期に直面しています。人々の意識は急速に物質的豊かさから文化的、精神的豊かさへ、ライフサイクルも単線型から複線型へ、そして教育システムも学校教育を中心としたものから生涯学習へと移行しています。

こういった変革の時代に博物館は、新しい文化や生涯学習時代の中核施設として人々の生活文化の発展に寄与することが強く望まれるようになってきております。このような社会的期待や要請に対応していくためには、これまでの博物館の在り方を抜本的に見直し、新しい時代に対応するマネージメントをしていくことが必要不可欠になってきています。

すでに、欧米では法律、経営、心理学、マーケティング、マスコミュニケーションなど多岐にわたる内容を組み入れたミュージアム・マネージメントという研究領域があり、その成果は博物館の実践的マネージメントや人材育成などにいかされています。

本学会は、このような欧米の成功に学びつつ、博物館と産業界、関連学会、教育界などとゆるやかなネットワークづくりを目指すとともに、社会的要請に対応したミュージアム・マネージメントを研究し、その成果を人々の生活文化の発展にいかしていくことを目指して設立したものです。

---

## 創造的な学会をめざして

会長 大堀 哲

---

かつて住んでいたイタリアで、しばしば家庭生活や学校の授業の実際を見る機会があった。そのさい、子どもたちの思考力や創造性、表現力を育むことの大切さをあらためて痛感させられたものである。ミラノのレオナルド・ダ・ヴィンチ科学技術館やスカラ座付属楽器博物館では、展示物をはさんで教師の働きかけに対してさかんに質問したり、じっと考えこんでいる子どもたちの様子が今なお鮮明に残っている。

いうまでもなく、我が国において、この思考力とか創造性の育成は教育の大きな課題であり、博物館活動においてもこれが重要であることに変わりはない。しかし、今日の激烈な受験競争の中では、それがいかに困難であるか明白である。博物館においてすら、単に知識を教えることに力点がおかれる指導方法がなかったわけではない。例えば、展示パネルの解説、オーディオガイド、ツアーガイド等にしても、また、各種の教室、講座、講習会等の教育活動においても、啓発とか教え込み型の発想で実施されてきた感は否めない。

博物館は既成の価値体系の押しつけの場ではなく、人々の知性を適度に刺激し、未来の創造へと導いていくところと観念していても、必ずしもそのように実践されているとは言い難いのではないか。利

用者から、博物館は“疲れるところ”とか“退屈するところ”という感想が依然として聞こえてくることはあっても、“おもしろかった”とか“感動した”という声はまだ大きく広がってこない理由の一つはこのへんにあるのかもしれない。知識の教え込み、詰め込み式では、受け手の利用者は“楽しい”雰囲気どころか、窮屈感や疲労感だけが感じられて、豊かな情報の交流や創造が行われたり、思考するゆとりがないのではないかと思う。快適に過ごせたとか楽しかったという印象をもって博物館をあとにすることができるようなソフトウェアのあり方が、いまこそ真剣に開発研究されなければならないし、その成果を実践に移し、人々の生活文化の発展に寄与していかなければならないと考える。

博物館の建物自体はモダンでデザインもすばらしく、重苦しい感じは消えつつあり、展示の手法も創意工夫されファッショナブルなものもみられるなど、現代人の感覚にマッチするようになってきた。それなのに必ずしも良い評価に結びついていないのは、博物館のイノベーションが不十分だということであろう。博物館の利用者、それもできるだけ一人ひとりのニーズを尊重するという視点が欠落していたのではないか、受け手のサイドに立ってではなく、提供する側の論理で運

営を進めてきたのではないかという厳しい反省がなされるのは当然のことであった。

このようなとき、本格的に博物館の運営上の諸問題、新しい時代に対応するマネジメントについて学術的にも実践的にも研究する機会をもつ必要があるという積極的な提案がなされた。数年前、国立科学博物館で博物館管理職対象のミュージアム・マネジメント研修事業を構想していた当時、沖吉和祐次長（現静岡大学事務局長）から「学会」設立の提案があり、第1回研修の講師、斎藤温次郎・斎藤報恩会自然史博物館専務理事及び堀由紀子江ノ島水族館長にはこのことについて強い賛同をいただいたし、また、第2回研修の講師、諸岡博熊UCCコーヒ

ー博物館長はこの学会設立について早くから動いておられ、積極的にバックアップしていただくなど、多くの方々の力強い励ましを得て平成7年3月18日に本学会を設立したのである。具体的に活動をスタートさせてからまだ日が浅く、これからが本番である。

ミュージアムのあり方、制度問題、事業展開、ソフトサービス、ミュージアムマネジメントの理論構築等の研究部会を設置し、活発な活動を展開していただければと思う。いずれにしても会員皆様からの積極的なアイディア、提案をいただき、創造的な学会へ向けて精いっぱい努めていきたいと考えている。

（国立科学博物館教育部長）

## J MMAの発足に当たって

副会長 斎藤 温次郎

学会の設立の趣旨にも明記されている通り、現在博物館のおかれた立場は時代の大きい波の変化により、抜本的に見直す時期にきています。今日博物館類の施設を含めて、国内では数千館と云われる程開設されており、敷居が高いと云われた堅苦しい博物館のイメージより脱皮しつつあります。幼児より高齢者までと年齢に関係なく幅の広い、自ら学び、遊び、楽しむことの出来る利用機関として、多極化したニーズに応えるべき身近な存在にならねばなりません。しかし建物としての施設はいいとして、知的な教養、学習の場として、開かれた博物館などとうたわれているが、残念ながら博物館の必要最低条件で生命とも云える肝心の学習するための展示物（資料）が少なく、また、収蔵資料の少なさを豪華な一点や、目玉的な資料の展示をデパートの宝石売場の如く、後生大事に展示し、複製、レプリカの羅列で展示を構成しているのが最近の博物館の現状ではないだろうか。これも近年の博物館数の増加の主因になっている全国各地地方地域の首長の「ハコ物行政」の集大成として、メモリアル的な立派な外観をもった建造物、タワーとして建築が先行するため、立地条件の悪い所に位置し、集客のために遊園地的フ

ィールドを併設した博物館となっており、その上不幸にしてマネジメントをする人材の確保が後廻しというのが実態であります。

このような人材不足の現状を打破し、博物館の五十年、百年という大計を視野に入れて私共はマネジメント学会を設立、発足させ、これを発展させる重要さは博物館の発展にも欠かすことの出来ない存在になるものと確信しております。戦後に出来た学芸員資格制度も今日の時代にそぐわぬものとなりつつあり、博物館に関連した各種の学会も多々あり、それなりの活動をされていますが、この際私どもの学会は狭いカテゴリーにとらわれず、あらゆる分野を越えた二十一世紀を展望する博物館のマネジメントを探究し、視野の広い学会として同好、同志の集いの場として発足したいと考えています。どうか学会という多少固いイメージにこだわることなく、切磋琢磨の出来る楽しい交流の場として集い、会員の遊び心をいかに学習の中核の場である博物館のマネジメントに生かすことが出来るか、人材の育成を含めて、自分をみがく場として学会の発展を念願するものであります。

（斎藤報恩会自然史博物館専務理事）

---

## 学会発足に寄せて

副会長 堀 由紀子

---

此度、国立科学博物館の御努力により、日本ミュージアム・マネジメント学会が設立されましたこと、誠に御目出度うございます。

二十一世紀を目前に、新しい社会システムの構築が今どの分野にも求められております。昨年戦後五十年という大きな節目の年でありましたが、ひとつの時代が終わる過程は、新しい時代の胎動でもあると思います。博物館も戦後の五十年、量的な拡大はめざましいものであり、さらにこの所、ハードの面でも巨大化し、利用者も年々増加して参りました。生涯学習時代を迎え、心の豊かさや個性化が求められ、生活の質的向上に向けられた中で、利用の方法も多彩になって来ており、その時代のニーズに合わせて、博物館のマネジメントのあり方も多角的な視野で行われなければならない時代に入りました。この社会の変革が求められる中でミュージアム・マネジメントは新しい研究領域として、時宜を得た学会で

あり、大堀会長の積年の御努力の賜物であり、会員の皆様の今後の御健闘を期待いたしております。この学会を通して出合いや交流が豊かになり、得られた情報は、明日への指針に役立つこととなり、新たな活力が生み出されと考えます。官・公立・民間と様々な運営形態においても共通した課題は永続的な発展や維持であり、社会的・文化的な貢献を如何になすべきか懸命で真摯な模索がなされなければなりません。

博物館学で、今日まで余り体系化されていないマネジメントの分野を、館・産・学と学際的な交流によって研究活動を推進することは、新しい時代への社会的価値の創造であると思われます。又、人は石垣、人は城と申しますように、良き博物館人としての人材育成の場として、大いに役立てられることを期待いたし、一人でも多くの御参加を御願ひしたいと思います。（江ノ島水族館長）

---

## 「変化を創造」する——学会に期待するもの——

副会長 諸岡 博熊

---

博物館に内在する諸機能を組み合わせた戦略で、変化する諸条件を踏まえ、機

能の最適結合を計画し、展開することをミュージアム・マネジメントと考える



と、それは「変化に最適対応する科学」ではなかろうか。博物館の運営を学術的に研究する科学という意味は「ある程度の予測を可能にする法則性を、その経験の集大成のなかから発見しようと研究する」ものといえる。

このたび博物館に関係するわれわれは、互いにその経験を持ち寄り、博物館運営の学術的研究を行う学会を結成した。そのためにも、その意識を持って、経験の蓄積をさらに求められる、といっても過言ではない。しかし、「変化に対応」を計画すると同時に、「変化を創造」する展開も忘れてはならない。すなわち、ミュージアム・マネジメントには、「対応」し「創造」することが求められていることに注目したい。創造性はまさに感性であり、美意識の問題である。

学会に期待することは、この美の問題の考究である。手始めに、各博物館のグラフィック・デザインの比較研究から実施してはどうだろう。

かつて日本の企業は、C I（コーポレート・アイデンティティ＝存在の個性化）を競ったが、バブル経済の崩壊とともに萎んでしまったいきさつがある。原因は種々あるが、主として内部意識の改革に徹底さを欠いたため、V I（ビジュアル・アイデンティティ＝存在の視覚化）のみを追いかけたため、変化に対応できずバランスを失ったのだ。

博物館が地域社会に発する種々の色、形でデザインされたもの——入館券、総合案内書、パンフレット、図録、ポスター、年報、ニュース、書籍、教育資料、カレンダー、企画展への招待状、プレス

キット、CD-ROM、ユニホーム、展示、建築その他いわゆるグラフィック・デザインについて、各館がそれぞれのデザイン統一を議論することで、館内の意識が高まるに違いない。内部の意識の变革から変化の対応策が生まれ、個性ある存在を確認することだろう。その結果、ミュージアム・アイデンティティが明確化され、個性化し、良き運営の環境と「変化を創造」する場づくりに役立つ。博物館が生きのびるためには、個性化しないと、創造の場としての存在意義が失われるからだ。

博物館の存続と繁栄の源泉は、利用者とそれをとりまく環境のおかげであるので、利用者志向と環境を整えることが大切である。市民社会に知識を教えることに専心してきた博物館は、いまや、高学歴、高所得、情報過多の市民社会にコントロールされて、個人の知恵を育む場の提供を求められていることに思いをいたすべきである。

「変化を創造」することは、このような利用者志向の意識から生まれてくる。物づくり社会から、文化的価値をつくりだす社会への転換が求められているので、博物館もこれに応える必要がある。否、文化的価値の創造に対して、先頭を切って市民社会の中にあるべきことが望まれるのだ。「変化を創造」することは、美意識なくしては行えないものと考えるので、関心を持つ人々を糾合し、経験則から学術的に究めたいものである。

このようなミュージアム・マネジメント・マインドを大切にする学会になってほしい。（UCCコーヒー博物館長）

---

## 博物館ルネッサンス

理事 沖吉 和祐

---

大切な資料・資源が失われつつある。資源の『宝庫』であり、資料に『命を与える』のが博物館だが、どうも、その影は薄い。「博物館」に対する一般の人々の理解は、博物館関係者が考える以上に低い。博物館法という法律を知らない人が多い。美術館や動物園、植物園、水族館を、「博物館」とは思っていない。

「博物館行き」という言葉があるように、「古めかしい」、「かび臭い」、「実用に役立たない」、「過去の遺物」との連想。1952年制作の映画“Singin’ In The Rain”では、トーキーに移る時期の無声映画の俳優 Gene Kelly が、“Picture is the museum piece, I’m a museum piece.”と嘆く場面がある。

わが国の多くの博物館には、残念ながらそんな所が多い。保存状態の悪い標本、何年も前の案内書、キューレーターの不在、埃のついた展示棚・・・。

もちろん、活発な活動を行っている所もある。特に、最近の水族館の普及・高機能化には目覚ましい。美術館の企画に面白い物がある。科学館の数は急速に増えており、そこでは体験学習が行える。しかし、どこに行っても、同じような仕組みなのである。近年、生涯学習の時代と言われ、また、学校5日制の普及に伴い、地域の「学習」の場として、博物館の存在が見直されている。さらに、科学

技術が発展する一方で「科学離れ」が指摘され、情報化が進む中で『実物』、『本物』、『伝統』などの大切さが認識されつつあり、この面からも、博物館の役割が高くなってくる。今後、博物館は、人々の要請に応じていくことができるだろうか。ここにしか無い貴重な資料、感動を与える展示、夢を膨らませる教育活動、素晴らしい思い出となるグッズ、心の和むスペース、美味しい食事……。各博物館が、それぞれにアイデンティティを持ち、特色ある研究開発、企画を行い、ネットワークを広げ、自己の魅力をPRしていくことが、『みんなの博物館』として生きていくために不可欠である。

このような、博物館の総合的なマネジメントについて、真剣に考えようとする動きが明確になったことは、意義深い。私は、大学全体を博物館化する「キャンパス・ミュージアム」の構想を推進しているところだが、それぞれの人が、それぞれの場で、新しい博物館づくりに向けて、ユニークな試みを行ってほしい。互いにその成果を積極的に交流しあうことにより、呼吸をし、話が交わせ、温かい血が流れる博物館を目指そう。

いま、ミュージアムのルネッサンス！  
「埃」を払い「誇り」を持とう。本学会の発展が楽しみである。

(静岡大学事務局長)

---

## 「学習院21世紀計画」と博物館構想

学校法人学習院 常務理事 香山 健一

---

21世紀を5年後に控えて、現在、学校法人学習院は『学習院21世紀計画：1991年～2001年』に取り組んでいる最中である。『学習院21世紀計画』は、平成3年度（1991年度）の学校法人学習院理事会において決定された学校法人学習院ならびにそれが設置している幼稚園、初等科、男女中・高等科、女子短期大学そして大学・大学院からなる8つの学校の平成13年度（2001年度）までの長期総合計画である。

『学習院21世紀計画』は、21世紀をめざす学習院の基本理念として、①伝統文化の継承と発展、②国際相互理解の促進、③自由、個性、創造性の重視、④徳育・知育・体育の調和、⑤少人数・一貫教育の推進を掲げて、「風格ある緑のキャンパスの再構築」から「生涯学習院・社会人教育のための体制整備」に至る8つの基本プロジェクトを総合的に推進しているところである。

こうした『学習院21世紀計画』を推進するなかで、学校法人学習院はいわゆる「キャンパス・ミュージアム構想」に強い関心を持つようになり、全国各地の博物館や学校と経験や情報を交流することを通じて、現在検討中の学習院博物館構想の具体化に役立てることができればと考えて、「日本ミュージアム・マネジメント学会」に学校法人として参加する

こととしたわけである。

学校法人学習院は、戦前、皇室博物館から寄贈された貴重な博物標本をはじめとして、大学史料館をはじめ、高等科、中等科等の各学校に価値ある史料や理科標本等を豊富に所蔵している。また各キャンパスには、明治・大正・昭和にわたる歴史的建造物や国の重要文化財が保全されている。

『学習院21世紀計画』の第2期ならびに第3期の事業計画のなかで、学校法人学習院としては、これらの史料、博物標本、文化財等を広く教育・研究資源として活用するために、小さくても質の高い新構想の「学習院自然史博物館」のようなものがないものか、真剣な検討を開始したところである。各界の専門家の知恵と経験に積極的に学びたいと考えているので、お力添え戴きたく、この機会によりしくお願い申し上げておきたい。

今後、この学会の会員各位からも、学習院博物館構想に対する創造的なアイデアや情報をお寄せ戴きたいと希望しており、そのような希望も込めて今回の日本ミュージアム・マネジメント学会第1回大会の会場提供に喜んでご協力申し上げようということになった次第である。

学習院の博物館構想に対する今後のご支援、ご協力をくれぐれもよろしくお願い申し上げます、入会のご挨拶としたい。



---

## 会員からのメッセージ

---

### ＜ 個人・学生会員 ＞

**秋山洋子**（三重県立美術館ボランティア）

昨今、「総合文化センター」等地域行政のすすめる建造物に「茶室」を附設或は意識して建築されたものが多くなったが、装飾的にすぎず、実際、利用されることは少ないと思うので、市民開放型の施設としてイベントの中に取り入れる方法を探るために、恐らく全然分野は異なるだろうと思いましたが、入会してみました。

**池辺伸一郎**（阿蘇火山博物館）

4月からの企画展の準備のため、今回は参加できそうにありません。申し訳ありません。今後ともよろしく願いいたします。

**稲垣美麻**（日精株式会社）

名目だけでない、施設の専門職員の必要性を、全国の地方公共団体がまず認知するようになれば良いなと思う。

**牛窪正**（懶感覚都市研究所）

「ミュージアムにおける人の役割」について研究したいと考えております。

**牛島一郎**（元科学技術館）

従来から使われている「博物館」をあえて学会名に使用せず、「ミュージアム」と公称したところに新しく学会を創設する心意気を感じるが、英語ではどちらも「museum」に違いなく、言葉をいじるだけでは客観的な実体を把握し切れないことも事実だろう。その克服を期待する。「日本ミュージアム・マネジメント」といったとき、「日本」はできるだけ国際的に、活動の力点は「ミュージアム」に置き、「マネジメント」は手段と考えて知恵を出していただきたい。

**種田明**（桃山学院大学）

桃山学院大学は本年（'96年）4月から博物館学芸員資格課程をスタートさせます。しかしながら、本学に限らず日本の大学における学芸員資格課程は、国際水準からほど遠いものであることは御存知のところでしょう。少しでも国際水準へ近づけるよう本「学会」が礎となっほしいと期待してます。（例えば、時代に即した“博物館にかかわる法律”の研究など）

## 長田健介

(東京都中野区立桃園第三小学校)

小学校ですが、校内に歴史資料室、美術展示室があるので、学校における博物館、美術館として整備したいと思っています。調べる活動、資料を活用する活動、美術作品を鑑賞するなど、考えています。

## 嘉田由紀子 (琵琶湖博物館開設準備室)

戦後まもなく発足した日本の博物館は、急激な社会変化のなかで新たな役割を求められているように思えます。博物館がもっている本来の良さ(資料収集の緻密さ、保存の確実さ、モノへのこだわり等)を生かしながら、現代の社会的ニーズにどうこたえていくのか、新しい博物館の思想や運営理念が求められています。私自身は、琵琶湖という1地域を見据えながら世界の湖沼の環境と文化について比較研究するという社会学、人類学の研究をしてきた者です。10年ほど前に、「地域環境の見直し」あるいは「地域文化の発見の場」としての博物館が必要ということを強く自覚し、琵琶湖博物館の提案、企画、準備にかかわってきました。その博物館はまだオープンしていませんので(96年10月一般公開)、大きなことは言えないのですが、博物館の世界のもつ潜在的な力に大きな期待を寄せています。博物館の世界のシロウトとして、今後の日本の博物館の方向を皆さまといっしょに考えていけたらと希望しています。

## 北澤さゆり

(北澤美術館・ルネリック美術館東京事務所)

これからの博物館は求心力や外部へ向

けての“発進力”のあるものでなければならぬと感じています。そういった方面の人材が日本では不足していると言われていますが、意欲ある人々の集まりであるこの学会がその先導的役割を担えるよう期待しています。また、現在メンバーである東京都文化懇談会でも、その必要性がかなり議論されています。

## 木下達文 (㈱展示学研究所)

ミュージアムマネジメントの問題は、私は常に人の問題が特に重要であると考えています。良い人材の育成および館側は人を多く採用しなければ、いくら方法論を言っても何の解決にならないくらいにも思っています。これは博物館協会でも博物館学会でも展示学会でも地方史学会でもいつも言われていることです。博物館にいかにも人を増やし、研究のできる環境を作れるのか。その具体的な方法を皆で考えていければと感じております。

## 倉本昌昭 (科学技術館)

東京北の丸公園の科学技術館においては、平成8年春オープンを期してこれからの科学館のパイロット展示としての光、メカニカルサイエンス、イリュージョン、創造・試作工房、メディア図書館をはじめ、宇宙、原子力など新しい展示の展開を企画している。理工離れ問題をかかえ、将来に向けて科学技術人材の育成、創造力の開発における理工系博物館、科学技術館の発展における学会の活躍を期待したい。

### 軍侍紀子（学習院大学大学院）

日本には、ミュージアム関係以外にも数多くの学会があります。いろいろな分野から会員を募るだけでなく、そのような学会との交流もできれば、より広い視野からミュージアムについて考えることができるのではないのでしょうか。

### 後藤和民（創価大学）

最近、佐賀県吉野ヶ里遺跡や青森県三内丸山遺跡をはじめ、各地において史跡の保存と活用が活発になっているが、これらの史跡整備において、実質的な保存と活用をなしうる機関や組織として、ミュージアム・マネジメントが益々必要となり、その役割や責任は重大となっている。こうした活動こそ、生涯教育をベースとする新しい文化の創造に寄与するところが大きいと確信しております。

### 匂坂信吾（沼津御用邸記念公園）

沼津御用邸記念公園では、西附属邸御殿の修復が終わり、2月から全館公開としたのに合わせて、御殿内部の展示の充実に踏み切りました。こうした歴史的展示とともに、スナゴケを用いた西庭や梅園なども重要な屋外展示と考えています。従事者全員が有能なキュレーターになれるよう、教育面での情報や示唆を求めています。

### 佐々木愛（三井不動産㈱）

早いもので、入社してもう1年が過ぎてしまいました。仕事に慣れるにつれ、自分が本当にしたいことが少しずつ見え

てきたような気がします。この学会は今の私にとって、とても意味のあるものだと思います。勉強させていただきます！

### 佐藤 琴（宮城県教育庁）

教育活動に興味を持っています。ミュージアムの新しい情報発信の中心となることを期待しています。

### 鈴木有紀（愛媛県総合科学博物館）

博物館での、ビジターの方々への学習活動の支援、特にインタープリテーション（解説）活動について関心を持っております。具体的な事例研究等がありましたら、お話をお聞かせ下さい。

### 須見隆（㈱丹青社）

今までの日本のミュージアムになかったマーケティング的視点で博物館運営を考えることができると期待しています。

### 関塚英一（㈱ムラヤマ）

ありとあらゆる領域で展示というメディアの必要性和有効性が語られはじめています。同時に地域という空間の枠組みもまた、一自治体から感性・利害を共有する広域へ、担当部門の横断化へ、教育システムが学校を包摂する社会教育システムへと全てにわたって、変更が求められている。新しい文化を構築する意味でも「ミュージアム」の意義は大きいと確信する。

#### 多田嘉孝（海遊館）

生涯教育の一環として、最近ミュージアムとボランティア活動の話題が多く取り上げられております。当館でもぜひ実施いたしたく計画しております。皆様方と一緒にその可能性等について研究したく思っています。

#### 棚谷喬（㈱電通アクティス）

2/1付で電通アクティス出向となりました。又、4/1付で電通テック、スペース映像事業部長就任予定です。引きつづき、学会活動に参画したいと考えています。よろしく願いいたします。

#### 塚田修（鳥羽水族館）

この期間は水族館にて仕事があり動けません。

#### 辻井晴美（㈱日精モデルメディア）

展示工事会社と学芸員や市町村などの担当者の立場や作業内容はどうかあるべきなのか？ 何もやりたいこともなく、すべてを展示業者にやってもらいたい県や市の担当者が多いと思います。展示業者もそれをくみ入れて仕事をとらなければ会社としてやっていけないのもわかりますが・・・。

#### 霞羽康夫

欧米では比較的ポピュラーになりつつある産・学と博物館との連携、博物館のニーズあるいは利用者のニーズといったマーケティングに、力を入れて欲しいと

願っています。また、関係機関・団体等への、存在のアピールをどんどんして欲しいと思っています。

#### 樋口弘道（栃木県立博物館）

博物館の建設・運営にかかわって19年になります。地方の公立博物館の運営はいろいろの面で多くの問題を抱えています。私は、いわゆる古いタイプの“博物館化石人間”ですので、本会の会員の多くの人達とは意見を異にすると思っています。新しいミュージアム・マネジメント学をいろいろの面から勉強させて下さい。

#### 細渕ますみ

（東洋英和女学院大学人間科学部）

現在大学生ですが、各企業の博物館運営に対する意見を伺う場として、学会に参加させて頂きたいと思っていますので、よろしくお願いします。

#### 曲沼三七夫（千葉県立房総のむら）

博物館の活動を科学的に捉える機会として、期待したい。また、世界の博物館情報を多面的に紹介する学会であって欲しいと思います。理論と実践の統合を図る視点をもった学際的な学会であって欲しい。

#### 元木郁子（㈱エム・エ・エム）

出来たての美術館（ブライアン・ワイルドスミス美術館）を運営する会社に勤務しております。このほど通信教育で学

芸員の資格を取得いたしました。暗中模索の状態ですので、この学会で自分なりの方向性を見出したいと思ひます。

**山本珠美**（東京大学大学院）

個人ではなかなか入手しにくい、ミュージアムの具体的な収支状況が知りたい

です。特に企業のミュージアムは実際にはどれだけの利益をあげているのか、又は赤字なのか、その辺りの状況を単なる理念としてではなく、具体的に情報提供して頂けないものではないでしょうか。（恐らく難しいでしょうけれども・・・）

## ＜ 法人会員 ＞

### 江ノ島水族館

海は生物の古里と云われ、江ノ島水族館の母体とも云える相模湾は、生物の宝庫として名高く、太平洋に面した相模湾のほぼ中央に江の島は位置しております。藤沢市片瀬西浜海岸に当館は昭和29年、日本で初の近代的水族館の第一号として開館し、その後マリナランド（昭和32）海の動物園（昭和39）と三施設の構成で建設されました。文部省指定の博物館相当施設として、社会教育の一端に資しており、本年で42年を迎えます。各施設は、魚の生態観察、イルカ・クジラの躍動感ある群泳、アシカ・アザラシ・ペンギンのコミカルな仕草や生態など魚類・無脊椎動物・鯨類・鰭足類の展示やショーを楽しむ場として総合水族館の役割を努めております。日本で初めてイルカショーを行ったマリナランドでは、5,000 tのプール内で110例のイルカが繁殖し、親子・孫の3世代が2頭成育しているという世界でも珍しい実績を持っており、稀少野生生物の保護を基本姿勢とした水族館の役割に貢献しております。夏の海洋教室や生涯学習セミナーを毎月開催し、参加型体験学習を重視しております。又、海のない地方や博覧会に移動水族館を行い、楽しみながら学ぶ場としての教育普及に努めております。

水族館のクラゲファンタジーホールでは、20数年かけて自家繁殖に成功した10数種のクラゲを夢のある美的展示とし、世界でも初めての試みです。又、サンゴの増殖に役立つバクテリアの生化学反応を応用したモナコ水槽は注目を浴びており、ホヤの水槽・水草の水槽等、実験的試みや新しい展示への研究開発も行っております。何といっても現在人気を博しているのは巨大な成長をするミナミゾウアザラシであり、1日1キロ以上の体重増加を楽しみにリピート客が増えております。今後共、水生動物を通してあらゆる年齢層に楽しみながら学ぶ場として御利用頂けるよう、努めてゆきたいと思ひます。

### （株）学習研究社

学研の出発点は出版でした。「音と光と文字とを結ぶ」を理想として、教育情報産

業のパイオニアとして、この道一筋に歩んでまいりました。このインフラの上に生涯学習関連施設、科学館や博物館等の施設の建築、展示の設計・施工業務及び大型映像・ドーム映像・マルチ映像等特殊映像の企画・制作を手がけてまいりました。これからも人と情報が出会う、最適情報環境の創造を目指し、見て、聴いて、さわって、感じて、知的好奇心を満足させる空間を作り出していきたいと願っています。

学研が提唱する、遊び心で学ぶ「アミュージアム（アミューズメント＋ミュージアム）」は望まれる最適情報環境の一つと確信しています。

### 竹中大工道具館

我が国の建築は古代から明治初期に至るまで、木造建築一筋の歴史を歩んできました。その造形の美しさ、それらを具現化する高度な技術や優れた技能は世界に例がなく、独特の進歩、発展を遂げてきました。それを支えたのが「大工道具」であります。

その大工道具も品質が良いものほど摩滅するまで使われるという厳しい宿命をもっています。また近年のめざましい機械化、電動化の進展によって伝統的な大工道具は急激に姿を消しています。

このため竹中工務店は急激に消えていく古い時代の道具、優れた道具を民族の貴重な遺産として収集・保存し、これらの調査・研究を通じて工匠の精神や技を後世に伝えるため「竹中大工道具館」を設立しました。

最初は企業博物館として昭和59年に設立されたものですが、その後平成元年に至り、これらの遺産により社会性をもたせるため、財団法人の認可を受け、現在に至っております。

日本の大工道具を主に、約2万点を収蔵、これらはすべて常に手入れされ、磨かれて、実際に使用できる状態で展示されています。

もの造りの原点は手造り、また日本の建築の原点はいうまでもなく木造建築であります。これを支えた大工道具に触れて、伝統的な工匠の心と技を体感し、新しいもの創りの糧にしていいただければ幸いです。

### 栃木県子ども総合科学館

当館は、21世紀を担う子どもたちが科学する心を持ち、創造性に富んだ社会人となることを願って、昭和63年に開館したもので、展示を中心とした科学及び科学技術の普及啓発施設としての機能と、遊びを通して心身ともに健全な子どもの育成を図るための児童厚生施設としての機能を併せ持つユニークな科学館です。

本年度の事業概要は次のとおりですが、通常展（展示、プラネタリウム）とともに多彩な催しを実施しているのが特徴ではないかと思えます。

- (1) 展示 「未来社会への探究」をテーマに、科学の原理原則・宇宙・地球・生命・情報・エネルギー・乗り物とロボットの各分野にわたる約200点の展示品がありますが、科学技術の進展や老朽化・劣化に対応するため、毎年1分野ずつ



の展示更新並びに改造を行っています。

「地球の科学」の更新が2月初旬に完成し、現在、来年度更新の「宇宙の科学」の企画を進めているところです。

また、多くの人々に科学を理解してもらうための「移動科学館」の実施に着手しました。

- (2) 天文 プラネタリウム（一般・年少者用6本のソフト作成）及び天体観望会（直径750mmの反射望遠鏡及び屈折望遠鏡を使用し、年間約50日程度実施）
- (3) 遊び 遊びの世界（展示場内）や水の広場・冒険広場・乗り物広場など各種広場を利用し、来館者が自由に遊びを展開する。
- (4) 催し 第2・第4土曜日、日・祝日、春・夏・冬休みなどを中心に、企画展・作品展をはじめ各種教室・講座、競技会など「科学や遊び」に関する催しを年間延340日程度開催しておりますが、特に、創造性を高めるための催しの拡大が課題となっております。

「魅力ある、親しまれる科学館」づくりをめざし、展示及び普及教育活動の充実強化に努めておりますが、科学館を取り巻く環境——人の意識・教育システムなど——が大きく変化しつつある現在、科学館の将来像を改めて問い直さなければと模索しているところです。

博物館の活性化を図り、社会の変化に対応する博物館づくりを進めるうえで、日本ミュージアム・マネジメント学会が果たす役割は大なるものがあると思われます。

多くの人々が係わり、広い視野からの研究協議や必要な情報提供などがなされる、それぞれの博物館のよりどころとなるような学会を期待しております。

### 内藤記念くすり博物館

内藤記念くすり博物館では、薬や医療に関する資料47,000点、図書27,000点を現在所蔵し、その一部を展示室に展示しています。また、館の周りには、600種類の薬草を栽培している薬用植物園があります。

活動としては、企画展（年1回開催）[96年度の企画展では『百年前の薬』展を5月1日から11月24日まで開催する予定]、薬草説明会（年8回開催）、植物画講座（年24回開催）、夏休み子供教室（年1回開催）、薬草友の会（年9回活動）をおこなっています。当博物館の情報伝達のために、『くすり博物館だより』を年2回発行しています。

設立、運営はエーザイ(株)によるもので、エーザイの創業者、故・内藤豊次氏が、日本の薬業の発達を伝える貴重な資料を後生に残そうと、全国の薬に携わる企業、個人の協力を得て、昭和46年に内藤記念くすり資料館として開設しました。

館内の展示は、信仰によって病を治そうとしたお守りや絵馬、蘭学が伝来した頃の蘭方医学の歴史を示す資料、江戸時代の製薬・売薬に関する資料、人々が日々の生活の中で用いた薬箱などに加えて、人車製薬機や江戸時代の薬屋の再現をお見せしてい

ます。2階の体験コーナーでは自分自身の健康管理のために食事の内容を入力することによる摂取カロリー計算をはじめ、血圧や肥満度などを測定する器械を設置して、自分の健康状態を把握する装置を用意しています。

### （財）日本習字教育財団 観峰館

観峰館の建設母体となりました財団法人日本習字教育財団は昭和28年の前身創立以来、通信によって書道教育に携わって参りましたが、それと並行して、博物館建設を念頭に置いての資料収集にも努めて参りました。その数は20万点に達しておりますが、内容は、中国の書画碑法帖はもちろん、我が国の明治大正期の教科書、世界の文字資料、アフリカ、オセアニアを中心とした民族資料など多岐に渡っております。資料の収集は故原田観峰（日本習字創立者・前財団名誉会長）が中心になって行って参りましたが、その背景には、民族の相互理解あるいは日本の文化発展に、いささかなりとも寄与できればとの思いがありました。「書道文化と世界を学ぶ博物館」を館のテーマとしましたのもその思いからでございます。私自身長年アメリカ・ニューヨーク市に在住しておりましたが、原田観峰を幾度となくアメリカに迎え、資料収集に共に東奔西走したものです。資料内容は一応の充実を見ましたが、次は博物館を建設するための用地が課題になりました。幸いにして公共団体をはじめ地域住民の皆様のご理解を得ることが出来、近江のこの地に、漸く用地を確保させて頂くことが出来、平成6年の着工に至ることが出来ました。そして平成7年9月には第1期工事が竣工し、10月1日に開館の運びとなりました。

今後は収蔵資料を順次展示公開して参りますが、その資料の1点1点が、鑑賞される方に民族の息吹、文化、歴史をかたりかける博物館として、そして皆様から愛され親しまれる博物館として歴史を刻んでいくことを切に願ってやみません。

なお、第1期工事の竣工と同時に、同敷地内に第2期工事を着工しておりまして、平成8年4月には収蔵庫、体験学習室、図書閲覧室、企画展示室などが完成し、博物館として更に内容を充実して参りますので、ご期待頂きますと共に、お気軽にご来館くださいますようお願い申し上げます。

（館長 原田博至）

### （株）文化環境研究所

#### 文化を取り巻く環境のあり方―「ミュージアムマネジメント」

ミュージアムにおけるマネジメントという言葉がすでに日常のものとなっている。ミュージアムの基本構想・基本計画業務を遂行していくなかでも、この考えに対する解答を導き出そうという努力が、日増しに私たちの業務の多くを占めてきている。

「文化環境研究所」という名の通り、弊社は、明日の文化を取り巻く環境のあり方をもう一度新しい視座で再構築し、地域や人々の暮らしに豊かな表情を取り戻す必要がある、――このことを基本コンセプトとし、昨年、設立された会社である。明日の文化を取り巻く環境を捉え直す、この考え方にしめる「マネジメント」の役割は大

きい。ただし、マネジメントとは何か、という基本認識を誤ったとたん、この言葉は地に落ちてしまう。博物館は、文化施設か集客施設か、この問いに対して得られる回答はさまざまであろう。文化集客施設である、といった答えすら聞かれるに違いない。これは間違いではない。人が集い、楽しみ、そして滞留する。この方法論を導き出すことこそが「ミュージアムマネジメント」であると、私たちは数多くのミュージアムの設立に関わる中で感じてきた。

極論すれば、この方法論を通じて、「人びとに幸せを与えることができる場」としてミュージアムは存在しうるものである。それは、決して、コストに置き換えられるものではなく、一体だれが心の豊かさを金銭価値に等価できるだろうか。経済偏重の感が否めないわが国の、いわば、病的な状態を、対症療法により治癒させていこうとするのではなく、根本的な体質改善を図っていく漢方薬のようなものに、ミュージアムマネジメントが位置づけられることを期待してやまない。

坂本龍馬は、「カンパニー」という言葉を日本語にできなかった。私たちは「ミュージアムマネジメント」に、この語と同じような印象を覚える。この、いわば輸入概念であるように思われる言葉に、日本語としての、つまり、日本の社会においての、市民権を得られる日を目指して、私たちは「ミュージアム」を模索し続けている。

(渡辺 創)

## UCCコーヒー博物館

設立早々のため過大な期待は遠慮するが、3年目で会員数が減少しないよう、3年目の会員獲得目標数を掲げたい。

学会の力は会員数と質によることを忘れずに。学会の存続と繁栄の源泉は会員にあることを肝に銘じて、会員サービスに努めて欲しい。そのためには、マネジメントの名に恥じないスマートな運営が望まれる。

会員の意向をアンケートしたいものである。

とりあえず、次の3大目標を掲げたい。

### ①会員に満足を与えること。

会則の範囲内での自由な言動を認める。学会への期待をアンケートにより対応すること。ニュースの発行による相互交流に努めること。

### ②学術的研究を行う機会をつくること。

論理体系の樹立を模索すること。ノウハウの研究、事例発表を奨励すること。新人の発掘、育成に努めること。

### ③内外の関係学術機関との交流を図ること。

講師の招へい、関係会議への参加、国際会議の開催など。

設立3年後、過去を振り返り自己反省し、来るべき時代への対応策を検討することとする。このためリニアル委員会を併設しておきたい。

民間のマネジメントパワーを取り入れる委員会を是非設置しておきたい。

---

## 編集後記

---

今回は、個人、学生、法人会員の方々から当学会に対する期待や近況報告をお寄せいただくことになりました。会員の皆さまの熱意と当学会に対する期待の大きさに事務局一同あらためてその重責を再認識しました。

とにかく、今回の会報が設立以来はじめてのものになるわけです。当学会は、『会員の皆さまがつくる新しいタイプの参加型の学会』を目指しておりますので、皆さまに出来る限り登場いただくことで、情報を交換し、新しい発想のヒントにしていいただければと、このようなかたちの誌面づくりをさせていただきました。残念ながら、一人一人のスペースが限られており、言い尽くせないことがあったことをお詫び申し上げます。

では、次回の創刊号でお会いできることを楽しみにしております。

---

JMMA

日本ミュージアム・マネジメント学会  
会報（創刊準備号）

---

平成8年3月9日 発行

---

事務局：国立科学博物館教育部企画課

〒110 東京都台東区上野公園 7-20

TEL 03-3822-0111(代)

03-5814-9876(直)

FAX 03-5814-9898